

●都市の地・層を読む

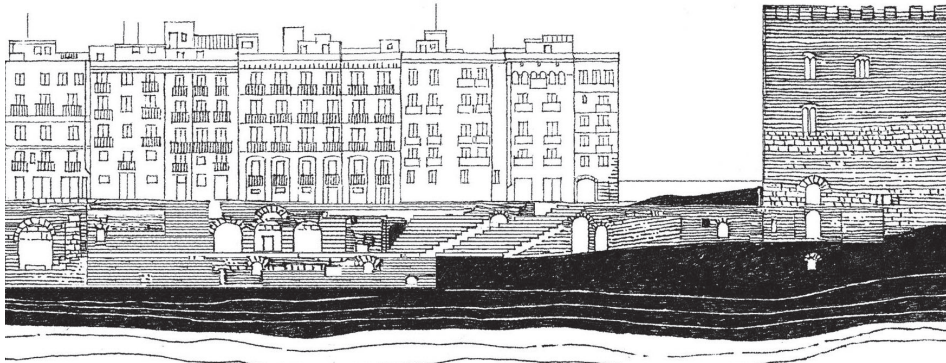
地層といえば、色味や質感の異なる土砂や礫岩が層をなして堆積している様子が思い浮かびます。横から力が加わって褶曲しているもの、断層を生じたものなど、さまざまなタイプの地層が存在します。

都市にも、長い歴史のなかで形成された層があります。たとえば、カトリックの大聖堂のような中世に遡る建築物では、ロマネスク期の小聖堂を原型として、後にゴシックやバロックなど、各時代の流行の様式で増改築され

ることが珍しくありません。そうした建物を観察すると、いくつもの層が合わさる物質のうちに、積もりゆく時を感じるができます。

同様のことは、都市全体にも当てはまりそうです。都市は、地形や水文がありなす生態環境と人間のつき合いを通じて姿を現し、進化します。岩山の上にできた古代都市が減じ、その遺構を利用して中近世の町が建設されるといった垂直方向の堆積は、都市の地・層の明快な例です(下図)。

しかし、市街地の発展とともに形成される水平方向の層の存在も見逃せません。新しい層の中にボツンと古い層が残っていることもあるでしょう。中川運河を軸とする名古屋屋敷西部では、台地、沖積低地、干潟などがつくる生態環境を土台として、運河開削や干拓地造成に代表される大掛かりな土木事業が行われました。中川運河エリアは、水平方向に大きく進化したユニークな地・層だと言えないでしょうか。



古代ローマ都市タラコの廃墟を利用して建設されたタラゴナ(スペイン)

絵で見て考える中川運河の「らしさ」

都市の「らしさ」は、直感的にはわかっていても、言葉にしにくいものです。視界に収まらないスケールの大きな特徴、目前にあっても気づきにくいリズム、意識化されていない付き合いの作法など。

そうした言語化しにくい町の底流をつくる脈を可視化するために、『絵で見て考える中川運河の「らしさ』と題する本シリーズを制作しました。

絵からヒントを得ながら、未来の都市づくりのために想像力を働かせましょう。

『空間コードから共創する中川運河』
鹿島出版会(2016年)
ISBN:978-4306073203、2,500円+税



『絵で見て考える中川運河の「らしさ』A1、2018年12月 制作・頒布：都市コミュニケーション研究所(riuc.takenaka-lab.net)
代表：竹中克行(愛知県立大学教授)、イラストレーション：クレメンス・メッツラー、解説：竹中克行
問い合わせ:nakagawa.c@group.email.ne.jp

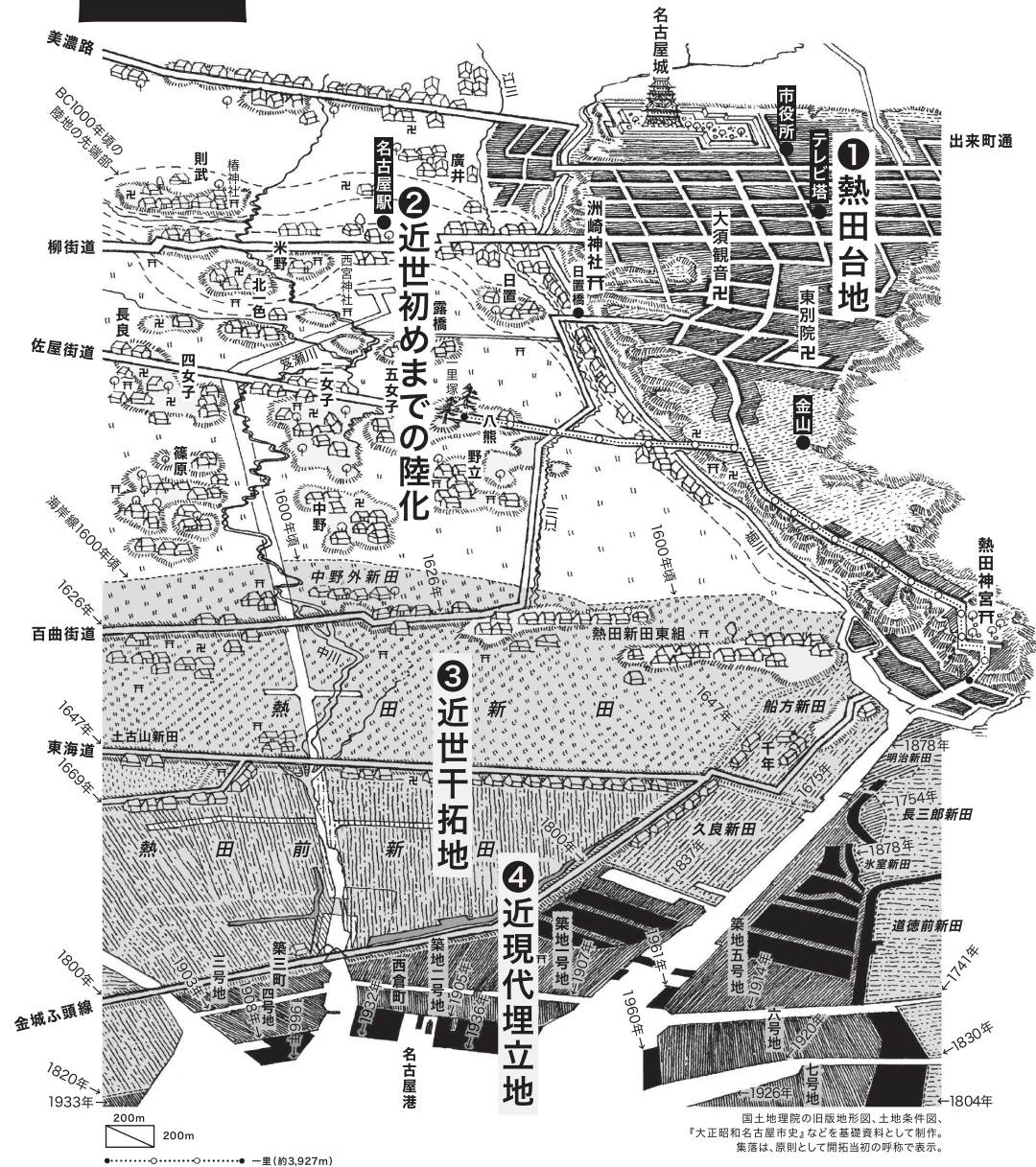


絵で見て考える中川運河の「らしさ」



海に向かう都市の層

中川運河の4つの地・層

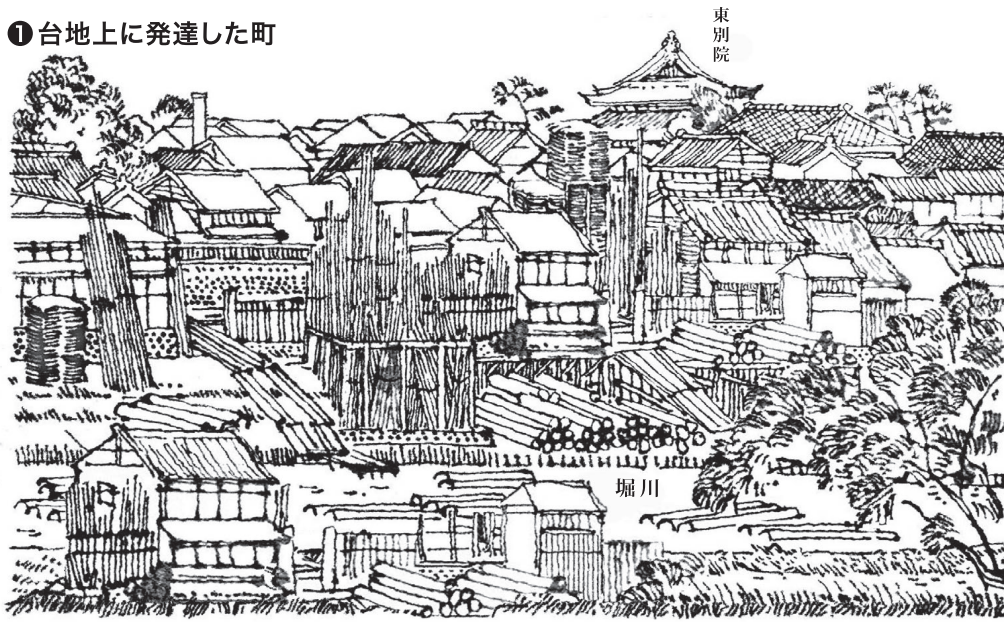


中川運河の空間コード

- A1 海に向かう都市の層 (2018/12既刊)
- A2 閘門式運河の水面 (2018/03既刊)
- A3 人工の自然堤防
- A4 緑のコリドー
- B1 運河を挟んで向き合う
- B2 インダストリアル空間
- B3 鳥と風が運ぶ都市の緑
- B4 連続体の美学
- C1 名古屋の大静脈
- C2 インタラクトする水土
- C3 「自然」とのつきあい
- C4 創造力の空間

国土地理院の旧版地形図、土地条件図、『大正昭和名古屋史』などを基礎資料として制作。集落は、原則として開拓当初の呼称を表示。

① 台地上に発達した町



明治・大正期の堀川をイメージし、のちの松重閘門付近から東方を眺めています。堀川は、熱田台地西縁の斜面中ほどを開削した水路です。昭和初期になると、沖積低地に開かれた中川運河が

西から堀川に接続しました。東に向けてせり上がる堀川端には、水路を伝って運び込まれた大量の材木が見えます。その奥で、東別院の本堂が存在感を放っています。

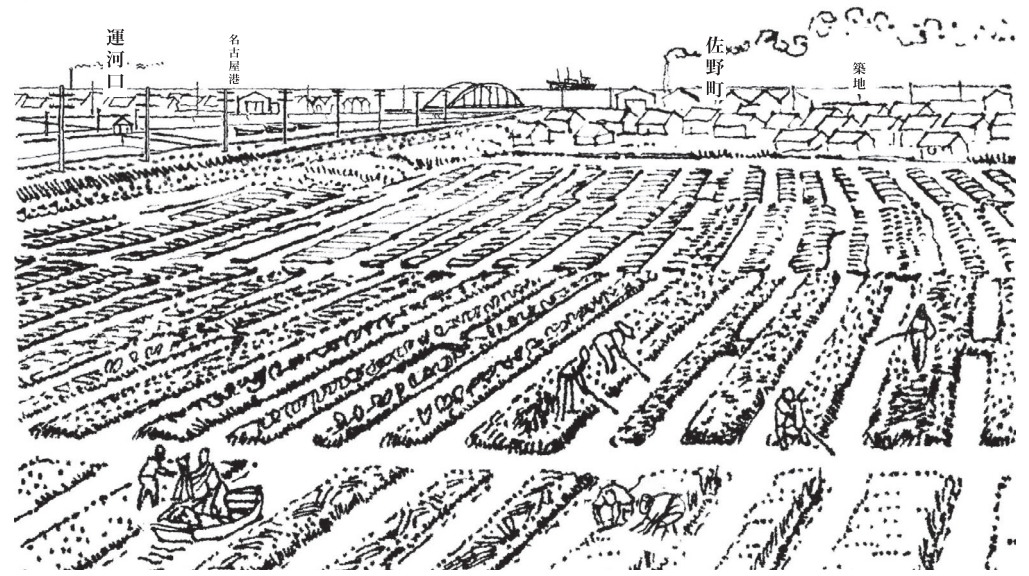
② 自然堤防上の集落



江戸後期にタイムスリップして、中川から名古屋城の方向をのぞんでいます。運河になる前の中川は沖積平野を蛇行しながら進み、河川堆積物がつくった鳥状の自然堤防上に集落が立地しました。

中ほどを横切っているのが佐屋街道で、五女子の近くには、熱田宿を出て最初の一里塚が道を挟んで立っています。遠景の熱田台地上には、城下の町並みが見えます。

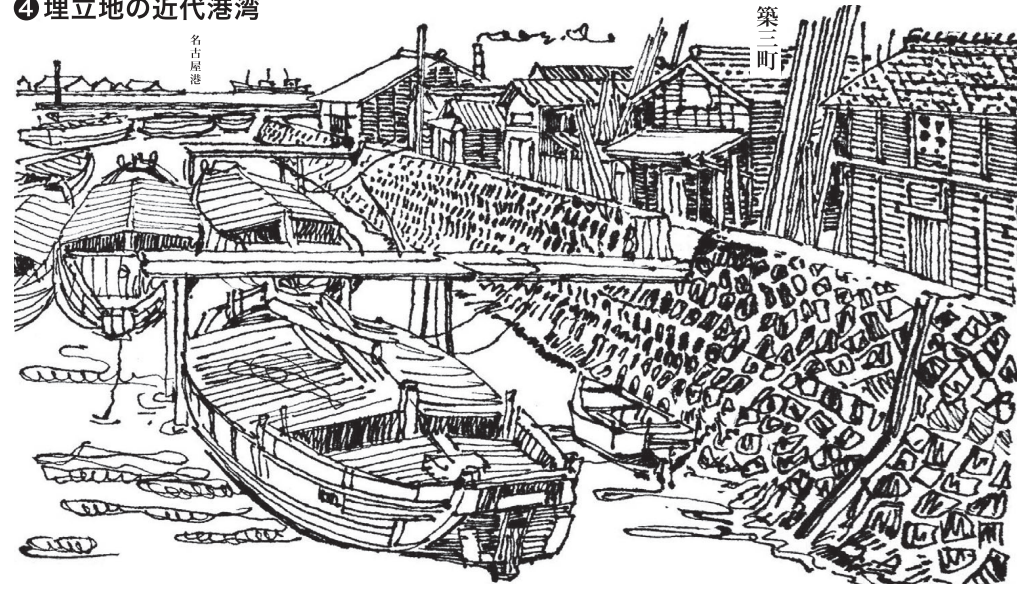
③ 干拓地の新田集落



昭和初期の寛政町(現・本宮町)付近に立って、港方面を展望しています。左側に完成後間もない中川運河、奥にはふ頭から築地にかけての港町が見えます。築地の手前には、解の船頭一家が住む町

(現・佐野町付近)が形成されました。水捌けの悪い干拓地の農業は、大きく畝寄せた「くね田」の形をとり、稲の収穫後はもう一段盛土して、畑作に利用します。

④ 埋立地の近代港湾



同じく昭和初期の築三町(築地三号地)の様子を中川橋から見ています。多くの解が係留され、堤防の切れ目から乗降の便をはかる足場が突き出ています。熱田湊に代わる名古屋港の建設は、熱田

前新田の干拓事業から百年余りを経た明治後期に行われました。名古屋港は埋立てで造成されたため、築三町は干拓地よりも土地が数メートル高くなっています。